

優秀賞

「水について考える」

開智中学校 三年 尾辻 莊龍

「水」について考えたところ、「ダム」という言葉が浮かんできました。ダムについて調べてみた時、環境省環境カウンセラー若林高子氏が記した「下久保ダムの物語」という記事を見つけました。ぼくはその記事を読んで衝撃を受けました。理由は、このダムの建設により、ダム湖に沈んでしまったいくつかの集落があったからです。下久保ダムは今の群馬県と埼玉県にまたがり、利根川の支流にあります。ダム建設に伴って水没犠牲者、合計三百六十四世帯で多くの村で水没に巻き込まれ、そのため、多くの町が団結して建設に伴う個人補償と公共補償の交渉にあたりました。大規模な水没に伴う補償問題であるにもかかわらず、昭和三十九年中に円満に交渉がまとまり、全国でも稀にみる成果を挙げました。

水没関係者も事業施工者も終始、良識と誠意をもって取り組み、いくつかの難関を突破し、円満妥結に至ったのでした。阿部吉春委員長は、「小中学校で学んだ教室や祖先伝来の墳墓が永遠の湖底に消え去ることには感無量のものがあるが、東京都一千万人の飲料水の確保、下流の洪水防止、かんがい用水、発電等、平和国家建設の役に立てば、祖先もお許し下さると念願する」と述べています。ぼくだったら、村をダムにするなんて進んで賛成できないと思います。

こうして昭和三十四年に着手した工事は、昭和四十三年に竣工。総工費約二〇〇億円、工事所要労力は延べ一五〇万人、竣工式は、水没関係者、工事関係者その他一五〇〇人が出席して、盛大に行われました。先祖伝来の田畑山林を手放してこの地を離れた人々は、移転場所として藤岡市、鬼石町等を希望し、それぞれ適職を選び、新しい職業に合わせて移転していききました。これら故郷を離れることを余儀なくされた犠牲者の方々のことは、永遠に忘れてはならないでしょう。

下久保ダムが完成して水が冷たいと苦情があったため、表面からの取水に切り替える工事が行われ、ダム関係の専門家や水没関係者など多く

の人々が「ダムの湖底を見られるまたとないチャンス」と、大勢、駆けつけるようになりました。いま神流湖の豊かな水をたたえる渓谷は、緑豊かな山並みを映し、平将門伝説や冬桜で知られる城峯公園や奇岩巨石が連なる天然記念物・三波石峡と一体となった景勝地として、四季折々に自然に豊かさやスケールの大きさを感じるエリアとなり、多くの観光客が訪れています。

また、下久保ダム建設によって転出した人々は、二年に一度のペースで同窓会を開催し、湖底に沈んだふるさとの思い出を語り合える場を持つてきました。しかし、移転後の人生のほうが長くなると、そうしただけでも次第に薄れていくでしょう。このような出来事がある以上、私達はダムの底に沈んだ村の苦難の歴史を永く語り伝えていかなければと思います。そして犠牲となった村や人々に感謝の思いを忘れず、ダムの役割や存在の大きさを理解し水を大切にしていかなければならないと改めて感じました。